

神奈川大学・浙江大学 第9回日中学術交流シンポジウムの報告

人文学研究所所長 鈴木 陽一

日時：1999年11月8日（月）～11月9日（火）

会場：神奈川大学六角橋キャンパス

1. 浙江大学代表団の日程

11月7日（日）：浙江大学代表団訪日

11月8日（月）～9日（火）：シンポジウム（内容の詳細は別項）

11月9日（火）：全学歓迎レセプション

11月10日（水）～11日（木）：横浜及び都内各所における視察と資料収集

11月12日（金）：帰国

2. シンポジウム

11月8日（月）

午前（個別テーマ）

「日本における最初期のニーチェ受容の一側面」

鈴木修一（神奈川大学外国語学部教授）

「ラスキンとブルクハルトの捉えたイタリア・ルネサンス」

鳥越輝昭（神奈川大学外国語学部教授）

午後（集中テーマ：「中国人日本留学史研究の現段階」）

報告者

田 正平（浙江大学教育学部教授）

呂 順長（浙江大学日本文化研究所講師）

大里浩秋（神奈川大学外国語学部教授）

阿部 洋（福岡県立大学人間社会学部教授）

孫 安石（北海道大学法学部専任講師）

コメンテーター

蔭山雅博（専修大学教授）

高田幸男（明治大学助教授）

周 一川（お茶の水女子大学助手）

★なお、本シンポジウムは科研費の助成による、本学と浙江大学との共同研究プロジェクトとの共催で行われた。ここに記して関係各位に謝意を表する。

11月9日（火）

午前（個別テーマ）

「大工道具が文化を語る——道具を押すか引くか——」

西 和夫（神奈川大学工学部教授）

「古今文化交流範式の研究」

陳 村富（浙江大学哲学学部教授）

午後（個別テーマ）

「楊家将演義について」

廖 可斌（浙江大学人文学部教授）

「三百六十行：一九世紀中国の市井風情」

黄 時鑑（浙江大学歴史学部教授）

3. 今回のシンポジウムの総括と今後の展望について

11月9日シンポジウム終了後、本学人文学研究所運営委員及び所長と浙江大学日本文化研究所王守華副所長、王宝平副所長、呂順長講師とによって、シンポジウムを総括し、更に来年度以降の学术交流の進め方について議論を行った。

双方は今回のシンポジウムが、科研費プロジェクトとの共催という新機軸をも含めて成功したという点で意見が一致した。

今後については、双方が国際交流における平等互恵の原則を尊重しつつ、更に学术交流の内容を充実させていくことで意見の一致を見た。特にシンポジウムの形式については一層の工夫が必要であること、研究成果を発表する場としての『中日文化論叢』については、すでに一部での高い評価を得てはいるが、より多くの読者の獲得のために一段の努力を行うことで概ね合意をみた。今後はこの議論に基づいてそれぞれの機関及びそれぞれの大学の関係部署において検討を行い、来年度の具体的な交流計画の策定を開始することとした。